

モーツァルトに会いたい・5

—— 最終回 ピアノコンチェルト ——

ピアノ・河野美砂子



「ローゼンタール」肖像画（作者不詳）

2009年3月20日（金・休）

午後6時開演（5時30分開場）

助成／ローム ミュージック ファンデーション 京都府立府民ホール・アルティ

ホルン／村上 哲 蒲生絢子 トランペット／竹森健二 横田健徳 ティンパニ／山本 毅

2006年に始まった演奏会シリーズ「モーツァルトに会いたい」も、いよいよ最終回となりました。簡単にこれまでの経緯を記しつつ、このシリーズを振り返ってみたいと思います。

2006年はモーツァルト生誕250年という記念の年に当たり、世界中でさまざまな催しが企画されました。

私自身は、まず「ミニ演奏付き講演会」でモーツァルトについて話してほしい、という依頼があり（その講演会の題名が「モーツァルトに会いたい」でした）、もちろん喜んで引き受けましたが、ピアニストとしてはお話だけでは何としても残念、ということになり、演奏会を自主企画。「ソロピアノ曲でたどるモーツァルトの生涯」という副題による演奏会「モーツァルトに会いたい」を、2006年11月に開催しました。

会場となった京都芸術センター（もと京都市立明倫小学校）に伝わる約百歳のピアノ「ペトロフ」の滋味ゆたかな音色や、古い小学校が改装された独特の雰囲気、それからもちろんモーツァルトの音楽の魅力が相まったためか、演奏会継続希望の声が多数寄せられました。当初、演奏会「モーツァルトに会いたい」は1回限りの企画でしたが、以上のような経緯でシリーズ化が決定しました。

第2回目は、「室内楽」という大きい括りを設け、「ピアノ三重奏曲」のマチネーと、「4手のためのピアノ曲（連弾）」のタペの2回開催となりました。ヴァイオリン・岸邊百百雄、チェロ・河野文昭、ピアノ・小林道夫の各氏と共演、2007年の梅雨の頃でした。

両回とも、どちらかといえば地味な分野でしたが、そのモーツァルトの豊かな音楽がこういうジャンルにもたくさん隠されていることにあらためて驚き、またたいへん嬉しく思いました。

第3回目は、長年のモーツァルティアンである詩人の谷川俊太郎さんをお迎えし、朗読やお話を聞きつつ、めったに演奏会では聞くことのできないソロピアノ曲を演奏しました。ちょうど1年前の2008年3月のことです。

このとき演奏した「指の練習 KV626b/48」の楽譜では、モーツァルトが弟子のために指使い（数字）を16分音符にすべて書き入れているのですが、その特異な指使いから、モーツァルトがその16分音符の連続音型をどのように感じていたか（4つずつアーティキュレートしていたと同時に、ポリフォニックに感じていた）が手にとるようにわかったのは、大きな収穫でした。

第4回は「ピアノ連弾で聞くオペラと交響曲」と題し、二人の若いピアニスト・岡部佐恵子さん、小石みなみさんとともに、オペラ「魔笛」抜粋と交響曲「ジュピター」を演奏、ピアノソロとはまた違ったモーツァルトの魅力を満喫しました。これは昨年の秋、2008年11月に開催されました。

両曲とも真の名曲ですが、連弾のための編曲なので、オリジナル曲を演奏する時よりも良い意味で気楽に弾くことができ、練習も含めて演奏することに沸き立つような喜びを感じました。

以上のような流れの中で、最終回はピアノコンチェルトで締めくくる、ということはいよいよ自然であるように私自身は感じています。

何しろまず、そのモーツァルトのピアノコンチェルト作品自体が名作としか言いようのないものであること。さらに、コンチェルトとは、ソロとオーケストラとの協演ではありますが、モーツァルトの場合、室内乐的な意味合いが多く含まれていて、ともに演奏する仲間とそのモーツァルト作

品演奏の喜びを分かち合うことができる・・・つまり、それは聞いて頂く方の共感にもつながるのではないかということです。

以前のプログラムノートにも書きましたが、実は、小学生のころ私はモーツァルトの音楽の良さがあまり理解できず、もっと斬新なハーモニーや素敵なメロディがある他の作曲家の作品に惹かれていました。ですが、年を経るにつれてモーツァルトの音楽の奥深さ、滋味、豊かであることに目と耳と心が開かれてゆく思いをし、また一方で、その楽譜には無駄な音符が1個たりともないことにも感嘆します。

【ピアノ協奏曲について】

雇い主であったザルツブルクの司教との決裂、父レオポルトの反対を押し切った結婚など、さまざまな事情で、フリーランスの音楽家としてウィーンに住むようになったモーツァルト。

楽譜出版やクラヴィア（当時のピアノ）のレッスンの他、生活費を稼ぐ手立てとして音楽会を何度も開催しました。「予約演奏会」と称する新作自演の会で、その一番の目玉が、モーツァルト自身が演奏し指揮するピアノ（クラヴィア）コンチェルトでした。ウィーンに住むようになった1981年（25歳）以来、35歳で亡くなるまでの間に計17曲も書かれ、いずれもモーツァルトの中期から晩年に書かれた名曲群です。

【ピアノ協奏曲第23番 イ長調 KV488】

一聴、こまやかな情趣や遠いなつかしさも感じさせつつ、洗練された美しさの音楽、とでも言えはいいのでしょうか。弾いていて、そのしなやかな曲線に魅せられます。1786年3月2日完成。

第20番から第26番までのピアノコンチェルトは、いずれもオーケストラ部分にトランペットやティンパニが入る中で、この第23番は唯一の例外です。クラリネットが使われているのも特徴で、後年の名曲「クラリネット五重奏曲」や「クラリネット協奏曲」を先取りする曲とも考えられます。

第2楽章の嬰へ短調・シチリアーノは、一度聞くと忘れがたい音楽ですが、この冒頭のメロディは、1775年作曲のピアノソナタ第2番 KV280 第2楽章冒頭や、ハイドンの作品にも同じメロディがあって、興味深いところです。第3楽章のロンドに見られるユーモアもまた印象的。全楽章にわたって木管楽器の活躍が聞きものです。

【ピアノ協奏曲第24番 ハ短調 KV491】

さきの第23番のわずか3週間後、1786年3月24日完成。

同じ時期の作品であるにもかかわらず（だからこそ、とも言えますが）、この2曲はさまざまな意味で対照的な作品となっています。第1楽章、冒頭オーケストラのミステリアスなテーマ、その後のピアノ独奏部分の厳しい孤独感、そして時に激しさも噴出し、私達が知っているいつものモーツァルトの、まったく異なった部分を覗く思いです。第2楽章は一転して、ピアノと柔らかな木管楽器の対話。第3楽章は、変奏曲になっていますが、変奏曲という範疇を越えた音楽がそここに聞こえてきます。特に第5変奏など、弾くたびにその音楽の、或る意味での痛ましさに圧倒されます。

モーツァルトのこの曲の自筆譜には、彼にしては珍しく何度か書き直しや訂正があり、また、本番が迫って書く時間がなかったため、独奏部分には音符が書かれていない所もあり、カデンツァ（独奏部分）も残っていません。モーツァルトは自分で演奏するので、書く必要がなかったからです。

本日の演奏では、その書かれていない部分を私自身が補って演奏します。

今回、この2曲を演奏するため時間をかけて練習していると、いろいろと気づくことがあります。たとえば、第23番、第24番の二曲は、表われた音、形としてはまったく対称的なものとなっていますが、音の素材（音の型）は、驚くほど共通するものが使われている、ということ。さらに驚いたのは、その同じ音型が、同じ時期に作曲された他の複数の作品に共通して使われていること。

演奏会シリーズ「モーツァルトに会いたい」で今までに演奏した曲の多くは、私が本当に惚れ込んで選んだ曲なのですが、その曲のいくつかは共通する音型があり、しかも、それらの多くが1786年作だということです。

第1回目の一番最初に弾いた「ロンド ニ長調 KV485」、「連弾ソナタへ長調 KV533」、「ピアノソナタ へ長調 KV497」、そして今回の「ピアノ協奏曲 第23番 KV488」と「ピアノ協奏曲 第24番 KV491」・・・。

モーツァルトが、同じ音型を使うことにどこまで意識的だったかはわかりませんが（ベートーヴェンなら確信犯ですが）、このことが、音楽自体とどのようなかかわりがあるのか、たいへん興味深いところです。

専門的な話とはともかく、モーツァルト自身は、一般の愛好家にも、また音楽専門家にも愛聴される音楽を書く、というモットーを持っていました。3年にわたってモーツァルトの音楽にかかわった私自身は、モーツァルトの音楽を通して、また、実人生も重ね、本当に深いものや悲哀、その他多くのものを感受することになりました。そのことを、心より感謝したいと思います。

モーツァルトさん、ありがとう。

Pf. 河野 美砂子(こうのみさこ)

京都市生まれ。京都市立堀川高校音楽科、京都市立芸術大学卒業。河村美千子、梅田志づ、島崎清、鈴木良一各氏に師事。芸大卒業後、井上直幸氏に師事。83年～84年ウィーン国立音楽学校のE. ウェルバ教授の歌曲伴奏のクラスに通う一方、ライプルクのビヒト＝アクセンフェルト女史のもとでさらに学ぶ。85年帰国後、ソロサイタルシリーズ（シュューベルトとシェーンベルク）を五年間にわたり開催。95年および96年には、そのまとめとして二晩にわたる連続リサイタルを、京都、大阪、東京にて開催した。室内楽の分野では、P.カルミレツリ氏（元イ・ムジチ合奏団主席ヴァイオリン奏者）を始めとする内外のソリストとの共演の他、ベートーヴェン・ヴァイオリンソナタ全10曲、同チェロソナタおよび変奏曲全8曲、同ピアノトリオ全曲演奏会「ベートーヴェンとの対話」等をシリーズで企画演奏した。その他、オーケストラとの共演、通奏低音（チェンバロ）等。フォルテピアノにも興味を持ち、シュューベルトの室内楽演奏会を開催した。88年淡路島国際室内楽コンクール優秀賞。

06年、ソロサイタル【モーツァルトに会いたい】を京都芸術センター講堂にて開催、従来とは違った形の音楽会が反響をよび、シリーズ継続が決定した。07年夏に【モーツァルトに会いたい・2】（室内楽特集・「ピアノトリオ」「4手のピアノ曲」）を開催。2008年3月、【モーツァルトに会いたい・3】（マニアクモーツァルト）では、詩人の谷川俊太郎氏の自作朗読やお話とともに、ソロ演奏をおこなった。2008年11月には【モーツァルトに会いたい・4】（ピアノで聞くオーケストラの作品）を開催。

97年より02年まで大阪音楽大学大学院（室内楽）非常勤講師、2000年より04年まで京都大学医療技術短期大学部（芸術学）非常勤講師、95年より現在まで京都市立芸術大学音楽学部（ピアノ）非常勤講師。

92年搭短歌会に入会。95年第41回角川短歌賞受賞。04年第一歌集『無言歌』（砂子屋書房）を刊行。同歌集により第5回現代短歌新人賞受賞。

vn 玉井 菜採 (たまいなつみ) 京都生まれ。桐朋学園大学卒業後、オランダ・スヴェーリンク音楽院、ミュンヘン音楽大学にて研鑽を積む。プラハの春国際コンクール、パッサン国際コンクール、シベリウス国際コンクールなど数々の国際コンクールに優勝、入賞。平成14年度文化庁芸術祭新人賞受賞。国内外で活発な演奏活動を行っている。紀尾井シンフォニエッタ東京、アンサンブル of トウキョウ、東京クライスアンサンブルのメンバー。東京藝術大学准教授。

vn 梅原ひまり (うめはらひまり) 桐朋学園大学卒業後、ベルリン芸術大学に入学し、トーマス・ブランディス氏に師事。'80年首席で卒業後帰国し、演奏活動を始める。これまでに数々のリサイタルやオーケストラとの共演、室内楽では多くの内外の著名な演奏家との共演を重ね、好評を博す。現在は京都市立芸術大学及び同志社女子大学で後進の指導にあたる一方、いずみシンフォニエッタ大阪のメンバーでもある。'98年 藤堂音楽賞、'03年 京都府文化功労賞をはじめ、数々の賞を受賞。

vn 塩見 裕子 (しおみひろこ) 東京藝術大学卒業後、京都市交響楽団に入団。在団中ウィーン国立音大に留学。在団中より各地でリサイタルや室内楽活動を行う。退団後、ニューヨークにて研鑽を積む。91年パッサン無伴奏全曲コンサート。94年より2000年まで京都チェンバーオーケストラのコンサートミストレス。NHKFM名曲リサイタル「無伴奏の魅力」に出演。最近では、2007年リサイタル。海野義雄、田中千香土、G.ヘッツェル、J.ロビンス等の各氏に師事。

vn 山本 裕樹 (やまもとゆうき) 1966年大阪生まれ。大阪府立岸和田高等学校、東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。大学卒業後渡米し、メイン州で開かれたボーダゲン音楽祭に全額スカラシップを得て参加。米国インディアナ大学大学院修士課程入学と同時にグットナー奨学金を得る。同課程を終了、修士(音楽)。現在、同志社女子大学音楽学科准教授。全日本学生音楽コンクール審査員のほか、(財)青山音楽財団音楽賞選考委員なども務める。

vn 田中 美奈 (たなかみな) 1994年桐朋学園大学音楽学部を卒業。北九州国際音楽祭においてクブモ・プライズ入選。1995年より桐朋オーケストラアカデミー研修課程終了。ドイツのPhilharmonie der Nationenのメンバーに推薦され、ヨーロッパ各地の演奏旅行に参加。1997年アカデミー終了後、大阪フィルハーモニー交響楽団第二ヴァイオリントップ奏者に就任、現在に至る。2001年名古屋市にてリサイタルを開催。野田淡路、森田玲子、菊池恭江、立田あづさ、故・久保田良作、藤原浜雄の諸氏に師事。

vn 濱名まり絵 (はなまりえ) 京都市立芸術大学卒業、相愛大学音楽専攻科修了。2004年京都室内オーケストラにおいてバロックザール賞を受賞。2005年同オーケストラのドイツ・フランス公演に出演。草津国際音楽アカデミー、ティチャー・ムジカに参加し、ファイナルコンサートに出演。京都フランスアカデミーを受講。ソリストとしてオーケストラと共演。2007年大阪でソロリサイタルを開催。これまでに畑千穂氏、岸邊百百姓氏、田辺良子氏に師事。現在、京都室内オーケストラのメンバー。

vn 荒巻美沙子 (あらまきみさこ) 兵庫県立西宮高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部卒業。現在、東京藝術大学大学院修士課程室内学科在学中。第11回 KOBE 国際学生音楽コンクール最優秀賞、神戸市長賞受賞。京都国際フェスティバル2007、第17回京都フランス音楽アカデミー等のセミナー受講。これまでにヴァイオリンを加納千春、東儀幸、山岡耕祐、梅原ひまり、玉井菜採の各氏に師事。室内楽を松原勝也、岡山潔、有森博の各氏に師事。

vn 上敷領藍子 (かみしきりょうあいこ) 現在東京藝術大学4年在学中。大阪国際音楽コンクール中学の部第1位。京都芸術祭にて京都市長賞受賞。全日本学生音楽コンクール大阪大会中学の部第2位。同コンクール東京大会高校の部第2位。石川ミュージックアカデミーにてIMA賞受賞。宗次エンジェルコンクール第3位。摂津リトルカメラコンクール第1位。これまでにオーケストラアンサンブル金沢、センチュリー響、藝大フィル等と協演。本多智子、田渕洋子、相山久美、浦川宜也、玉井菜採の各氏に師事。

vn 渡邊明日香 (わたなべあすか) 三歳よりヴァイオリンを始める。兵庫県立西宮高等学校音楽科卒業。第12回 KOBE 国際学生音楽コンクール優秀賞受賞。第17回日本クラシック音楽コンクール全国大会入賞。これまでにヴァイオリンを飯尾まり、田村知恵子、岡山潔、四方恭子氏に師事。現在京都市立芸術大学音楽学部在学中。四月より同大学院進学予定。

va 山本由美子（やまもとゆみこ） 桐朋学園大学音楽学部にてヴァイオリンを、デトモルト国立音楽大学、ケルン国立音楽大学マスターコースにて、ヴィオラと室内楽を学び、ヨーロッパ各地で演奏会、レコード録音などを続けた後帰国。現在、ソリストとして、室内楽奏者として各地で演奏。1970年西日本学生音楽コンクール第一位。1981年ウォルフガング・ホックコンクール第1位。1982年ジュネーブ国際コンクール銅メダル。1998年度パロックザール賞。現在、京都市立芸術大学非常勤講師、相愛大学非常勤講師。

va 中田 美穂（なかたみほ） 相愛大学音楽学部卒業。桐朋オーケストラアカデミー修了。バイオリンを西村順吉、田川佐麻里、小栗まら絵の各氏に師事。卒業後ヴィオラに転向。パリ・スコラ・カントルムにて森悠子、Aki saulieir, Bone nicola の各氏に師事。相愛オーケストラと共演。長岡京室内アンサンブル、ミノナトリオ等で室内楽奏者として活動。

va 木田 佳余（きだかよ） 8歳より天理教音楽研究会弦楽教室にてヴァイオリンを始める。京都市立芸術大学音楽学部卒業。在学中にヴィオラに転科。これまでにヴィオラを山本由美子氏に、ヴァイオリンを岩谷悠子、渡辺美穂、バプアゼ・ギオルギの各氏に師事。また室内楽を久合田緑、上村昇、四方恭子、市坪俊彦の各氏に師事。四月よりフライブルク音楽大学に進学予定。

vc 河野 文昭（こうのふみあき） 京都市立芸術大学卒業後、文化庁在外派遣研修員として渡米。さらにウィーン国立音楽学校にて研鑽。84年帰国後は独奏者、室内楽奏者として国内外で活発に活動を行っている。紀尾井シンフォニエッタ東京、アンサンブル of トウキョウ、東京クライスアンサンブル、静岡 AOI カルテットのメンバー。第50回日本音楽コンクール第一位。京都音楽賞、京都府文化賞等受賞。東京藝術大学教授、中国天津音楽学院客員教授。

vc 五味 敬子（ごみけいこ） 京都市立音楽高校、京都市立芸術大学卒業。音楽学部賞、京都音楽協会賞受賞。在学中、リスト音楽学院に留学、C・オンツァイ氏に師事。第18回京都音楽祭にて京都市知事賞受賞。第18回京都フランスアカデミーを受講、奨学金を得てパリ・エコール・ノルマル音楽院入学。第6教育課程を満場一致で終了。現在パリ市立音楽院古楽科に在籍。Abbaye aux Domes, JOAに参加中。上村昇、雨田一孝、五味尚子各氏に師事。パロックチェロを A. Zweistra, D. Simpson の各氏に師事。

cb 南出 信一（みなみでしんいち） 16才よりコントラバスを始め、1972年、京都市立芸術大学に入学と同時にテレマン室内管弦楽団に入団。93年、左手人指し指故障により同楽団を退団。翌年フリーの演奏家として復帰、現在に至る。コントラバスを西出昌弘、ゲーリー・カー各氏に、室内楽を故・黒沼俊夫、ゲルハルト・ボッセ各氏に、指揮を堤俊作氏に師事する。現在、神戸女学院大学、兵庫県立西宮高校の各音楽科講師、和田山少年少女オーケストラ指揮者、ライツ室内管弦楽団を主催。

fl 長山 慶子（ながやまけいこ） 京都市立堀川高校音楽科を経て、京都市立芸術大学卒、パリ国立高等音楽院卒。ランパル国際フルートコンクール5位入賞、京都市新人芸術家選奨等多数の受賞。元大阪センチュリー交響楽団首席奏者。日本フルート協会常任理事、アジアフルート連盟理事、日本音楽コンクールの審査員等を務める他、現在、大阪音楽大学短期大学部准教授、同志社女子大非常勤講師。

ob 大島弥州夫（おおしまやすお） 大阪音楽大学首席卒業。東京読売新人演奏会、東京・大阪でのヤマハ管楽器新人演奏会に出演。なにわ芸術祭新人賞受賞。宝塚ベガ音楽コンクール木管部門入選。その後、東京音楽大学大学院にて宮本文昭、古部賢一の各氏に師事。小澤征爾音楽塾オペラプロジェクト、サイトウ・キネン・オーケストラ、東京のオペラの森管弦楽団、水戸室内管弦楽団に参加。NHK-FM「名曲リサイタル」出演。現在「いずみシンフォニエッタ大阪」メンバー。

ob 東口佐和子（ひがしぐちさわこ） 大阪音楽大学卒業。奈良市新人演奏会に出演。第5回高槻音楽コンクール入賞。アルブレヒト・マイヤー、ジャン＝ルイ・カベツァリ、宮本文昭、青山聖樹各氏のマスタークラス受講。これまでに呉山平煥、林哲也、古部賢一各氏に師事。現在、大阪スクールオブミュージック専門学校講師。また関西を中心にオーケストラ、室内楽などの分野で活動している。

cl 小谷口直子 (こたにぐちなおこ) 兵庫県生まれ。東京藝術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了。2001年、第12回日本木管コンクール・クラリネット部門第2位。2002年、第14回宝塚ベガ音楽コンクール・木管楽器部門第1位。第71回日本音楽コンクール・クラリネット部門第1位、併せて増沢賞、E.ナカミチ賞受賞。2003年、京都市交響楽団入団、現在、同楽団首席クラリネット奏者。これまでに、クラリネットを藤井一男、村井祐児、山本正治、川畑真一の各氏に師事。

cl 松尾 依子 (まつおよりこ) 大阪音楽大学を優秀賞を受賞し卒業。在学中奨学生として渡仏。第19回欧日音楽講座にてビュッフェランポン第一席奨励賞受賞。第20回摂津音楽祭第1位・大阪府知事賞受賞。第17回宝塚ベガ音楽コンクール第4位。第18回日本木管コンクール第3位・聴衆賞受賞。第7回日本クラリネットコンクール入選。これまでにオペラハウス管弦楽団、大阪センチュリー交響楽団と共演。本田耕一氏に師事。オペラハウス管弦楽団準団員。大阪音楽大学演奏員。

fg 畦内 雅人 (あぜうちまさひと) 15歳よりファゴットを始める。1999年津山ダブルリードコンクール第3位。2000年沖縄電力主催シュガーホール新人演奏会入選。同年8月アジアユースオーケストラに参加し、香港・韓国・ベトナム・オーストラリアでの演奏会に参加。2001年大阪音楽大学を首席で卒業。2004年第16回アフィニス夏の音楽祭に参加。ファゴットを日名弘見氏に師事。大阪音楽大学オペラハウス管弦楽団ファゴット奏者を経て、現在大阪フィルハーモニー交響楽団トップファゴット奏者。

fg 宇賀神 智恵 (うがじんちえ) 愛知県出身。大垣女子短期大学音楽科卒業。在学中に岐阜県より奨学金を受けイタリア・マペリーニ音楽院へ留学。第21回中部読売新人演奏会に出演。99年PMFにジュニアフェローとして参加。これまでに伊藤武、マウリツィオ・フェデー、シュテパン・トゥルノフスキーの各氏に師事。中部フィルハーモニー交響楽団団員。

hr 村上 哲 (むらかみさとし) 1988年京都市立芸術大学卒業。音楽学部賞を受賞。その後ドイツ・フライブルク音大在学中に京都市交響楽団に入団。99年より大阪フィルハーモニー交響楽団ホルン奏者として現在に至る。90年第59回日本音楽コンクール・ホルン部門最高位。88年第5回日本管楽器コンクール入選。真下淳至、田中正大、アイフォー・ジェイムス、93年、文化庁在外研修員としてシュトゥットガルト音大にてヴラトコヴィッチの各氏に師事。京都市立芸大、大阪芸大、相愛大各非常勤講師。

hr 蒲生 絢子 (がもうじゅんこ) 大阪府立夕陽丘高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部音楽学科卒業。第5回KOBE国際学生音楽コンクールにおいて、優秀賞及び神戸市教育委員会賞受賞。これまでにホルンを、川島裕、猶井正幸、村上哲の各氏に師事。現在関西を中心にフリー奏者として活動中。

tp 竹森 健二 (たけもりけんじ) 京都市立芸術大学音楽学部卒業。ドレスデン国立音楽学校カール・マリア・フォン・ウェーバーに留学。1993年大阪文化祭奨励賞受賞。現在、大阪音楽大学講師。ジャパン・プラス・コレクション、いずみシンフォニエッタ大阪のメンバー。

tp 横田 健徳 (よこたたけのり) 大阪芸術大学卒業、学科長賞を受賞。広島トランペットコンクール第1位。大阪文化祭本賞受賞。現在、テレマン室内管弦楽団、コレギウム・ムジクム・テレマンのソロトランペット奏者。ジャパン・トランペット・アカデミー、ウインド・カンパニーのコンサート・マスター。ジャパン・プラス・コレクションのメンバー。岡山学芸館高校非常勤講師。

timp 山本 毅 (やまもとつよし) 京都市立芸術大学音楽学部、デュッセルドルフ音楽大学で打楽器を、アンテオケ国際宣教師神学校でキリスト教神学を学ぶ。札幌交響楽団を経て、現在京都市立芸術大学音楽学部教授、ユーオーディア管弦楽団打楽器奏者、打楽器アンサンブル「P.A.N.KLANG」[KYOTO PERCUSSION]代表、マリンパアンサンブル「Ensemble Philia」メンバー。2000年度パロックザール賞受賞。